

アンドレ・ブルトンと野生の思考（2）

——「ホピ・インディアンの地への旅の手帳」をめぐる

谷 昌 親

マルチニックを出発したプレジデント・トルヒーヨ号は、グアドループやドミニカ共和国に寄港したのち、一九四一年七月はじめ、ついにニューヨークに到着した。ひと足早く亡命していたイヴ・タンギーなど、ニューヨーク在住のシュルレアリストや友人、またシュルレアリスムに共感を抱く人びとに暖かく迎え入れられ、ブルトン夫妻は西一丁目の小さなアパートメントでの生活を始める。ブルトンは、BBC経由でフランス向けのニュースを送る戦争情報局製作のラジオ番組「アメリカの声」で原稿を読み上げ、デヴィッド・ヘア、マルセル・デュシャンとともに新しい雑誌『VVV』の編集長となって、一九四二年六月に出た創刊号に「シュルレアリスム第三宣言か否かのための序文」を発表した。また、当時マックス・エルンストと同棲していたペギー・グッゲンハイムが企画して同年十月に開かれた展覧会「今世紀の美術」の作品選定に助言を与え、ある意味でシュルレアリスム美術を総括する「シュルレアリスムの起源と芸術的展望」をカタログの序文として執筆するといった活動をおこなう。その一方で、仲間と集まってシュルレアリスム遊戯にふけり、デュシャンとフレンチ・レストランで昼食をとり、エルンスト、レヴィ・ストロース、ジョルジュ・デュテュイラと骨董屋めぐりをするなど、それなりにニューヨークでの生活を充実したものに

ていた。しかし、これまでシュルレアリスムの活動の場としていたパリから遠く離れ、しかも英語が得意でなかったブルトンにとって、亡命生活は快適とはいいがたいものだったようだ。のちに彼は、アメリカが自分に避難場所を提供してくれたことに感謝の念を表明しつつも、この時期のことを次のように振り返っている。

ニューヨークで過ごした五年間は、公的活動の面では、参加した二度の戦争という枠内で自分の行状に宛てた簡潔な説明に較べてみても、それより詳しい報告をすべきものとは思えません。自分の自由が限られている場所では、わたしは存在しないも同然ですし、なるべく早く通り過ぎてしまいたいと思ふことになります。しかし、その自由は、アメリカの諸機構の働きのせいで与えられなかったというより、むしろわたしが自分自身に対して制限してしまっていたのだ、というのも本当です。⁽¹⁾

しかも、そうした閉塞状態にあるブルトンに追い打ちをかけるような出来事が起きる。彼とは違い外交的だった妻ジャクリーヌが、『VVV』の共同編集者でもあった若いアメリカ人画家デヴィッド・ヘアの許に走り、やがて一人娘のオーヴも妻に引き取られてしまう。シュルレアリスムの法王とまで呼ばれた男は、異国の地でこれまでにない孤独をかこつことになったのだ。だがそうした彼に、新たな希望の光が射してくる。チリ出身の女性エルザとの出会いだった。一九四四年の夏から秋にかけて、ブルトンはエルザを伴い、カナダのケベック州の南側でアメリカとの国境から近く、東に向かって突き出たガスペジー半島の突端部にあるガスペ岬に二カ月近く滞在し、『秘法十七』を書きあげた。パイプオルガンに似た形の船にも、人間の横顔にも見える断崖ロシエ・ペルシエ、そして妖精メリュジーヌから靈感を得たこの書物で、彼はエルザについて次のように書いている。

凍てつく街路で、全身は震えの鑄型に入れられ、ただ眼だけを表に出しているようなきみにわたしは再会した。襟を高くあげ、口をマフラーで覆ったきみは、秘密のイメージそのもの、明かされる瞬間の自然のおおいな秘密のイメージそのもので、嵐の終わりのごとききみの瞳のなかには、虹があわくかかっているのが見えた。⁽²⁾

*

翌一九四五年の夏、二人はふたたび旅行に出た。今回はアメリカ西部をめぐり歩く旅だったが、この旅にブルトンは明確な目的を二つ定めていた。ひとつは、離婚や再婚を望む者にその場で簡便に希望をかなえてやることで知られるネヴァダ州リノに、最低六週間が必要とされる法的措置の条件を満たすために滞在し、ジャクリーナとの離婚、そしてエルザとの再婚を果たすことだった。シカゴを経て六月半ばにレノに着いていたブルトンの願いは、七月三十一日によくやく現実のものとなる。もうひとつの目的は、ネヴァダ州の東南側に隣接するアリゾナ州、そしてさらにその東側のニューメキシコ州にあるプエブロ・インディアン⁽³⁾の保留地、とりわけホピ族の土地を訪ねることだった。八月になると、リノ滞在のための住居を見つけてくれた、陶芸家でありデュシヤンの友人でもあるジャンヌ・レイナル、そしてその夫アーバン・ナイニンジャーを伴って、ブルトンとエルザはコロラド州のグラッド・キャニオンを通り抜け、さらにアリゾナ州、ニューメキシコ州西部へと足を伸ばし、ナバホ族、ズニ族、アパッチ族、そしてホピ族の居留地を見てまわった。

なかでもこの旅行の主眼がホピ族の地を訪れることであったのは明らかで、そのことは、未発表に終わった「ホピ・インディアン⁽⁴⁾の地への旅の手帳」に如実に表われている。十二×七・五センチとかなり小型の手帳に綴られている

のは、冒頭にこそアリゾナ州フラッグスタッフの北アリゾナ博物館やこの地に住むナバホ族についての一節があるものの、その北アリゾナ博物館でもブルトンが眼にとめたのはホピ族の女性の写真であり、その後、八月七日(または八日)にホピ族の居留地のあるホテビラで目覚める場面から、八月二十七日、近くの町でズニ族の描いた牛の踊りの衣装の絵を買ったことについての記述まで、ほぼ一貫してホピ族の地での体験となっている。アリゾナ州北東部の高地のメサと呼ばれるテーブル状台地に住み、十九世紀半ばまで近代社会との接触を拒んできたこのインディアン部族は、それほどまでブルトンの関心を引いたのだが、それはもちろん彼だけのことでなく、すでに多くの民族学者がホピ族に惹きつけられていた。ブルトン自身、ホピ族についての民族学の著作をこの旅のあいだ何度も参照している様子が見て取れ、ときには手帳にその一節を引用もしている。

だがブルトンがホピ族やその文化、とりわけカチナと呼ばれる人形に興味を抱いたのはかなり早い時期からで、一九二七年十月に刊行された『シュルレアリスム革命』誌第九―十合併号にはカチナの写真が掲載されている。ちなみに、カチナの写真が掲載されたページと見開きになった次のページには、シュルレアリスム遊戯のひとつである「優雅な死骸」によって描かれた、頭は長髪で色黒、首は玉蜀黍とうもろこし、両腕は鳥、そして下半身は蝟くさびと見なせる奇妙な存在のデッサンが掲載され、カチナとのあいだに一種の響きあいをもたしている。この頃、ブルトンとエリュアールはカチナを実際に手に入れていたのであり、ブルトンの場合、そのカチナは自宅のアトリエに飾られた数多くの絵画や彫刻などのなかでも、重要なコレクションのひとつとなる。そして、アメリカカポブラの木で彫られ、宗教的儀式で仮面を着けて踊る人の姿をかたどったこの人形を、シュルレアリスムと関連づけて眺めるようになるのである。『シュルレアリスムと絵画』(一九二八年)においては、コラーージュで奇妙な混合的存在を描きだすマックス・エルンストに触れつつ、それが「ニューメキシコの人形人形のようだ」と述べる。一九三六年には、パリのシャルル・ラトン画廊で「シ

ユレアリスム・オブジェ」展が開かれるが、その会場には、さまざまなオブジェと並び、カチナが展示されている。⁽⁵⁾すでに述べた一九四二年の「今世紀の芸術」展でもカチナは展示室に並べられた。

当然ながら、今回の旅行においても、カチナを入手することがもくろまれていたし、実際に購入したという記述が何度も出てきて、人形や仮面についての細かな説明もある。しかしながら、この「手帳」に出てくるカチナに関する記述はむしろ限られている。ホピ族について書物を通していろいろと知識を得ていたとはいえ、実際に自分の眼で見る居留地やそこに住む人びとの様子は、新奇さを好む彼の心をすぐさまとらえたようだ。周囲の状況や住居、食事やいろいろな風習、玉蜀黍の栽培、衣装や髪形や装身具、そして顔や身体への彩色など、話題はさまざまなものに及び、ところどころにスケッチも添えられている。ときには、参考文献から得た知識をもとに、プエブロ・インディアンの歴史、とりわけ白人との闘いの歴史が語られもする。そうしたなかでも印象的なのは、居留地周辺の風景にブルトンの筆が及ぶ箇所だ。マルチニックの熱帯特有の風景とは対照的な、岩山ならではの荒涼とした景色にも彼は魅力を感じたようだ。ホテビラに夕刻に到着したときの記述は次のようになっている。

……まるごと砂岩でできた家の連なり——平らな台地をなし、そのなかで浸食作用を受けた大きな塊が積み重なって見え、鳥の相貌を呈している岩の集まりのなか、ブロンドの水晶さながらの高台の村。⁽⁶⁾

あるいはまた、八月十二日にアパッチ族の地に足を踏み入れた際には、次のように記している。

松、松で覆われた山、白い雛罌粟^{ひなげし}、ビロードモウズイカ、ユッカが両側に咲く道、スカンクの臭い、サボテン、乾

燥させたユッカで作られたテント。⁽⁷⁾

さらに、ブルトンたちがいろいろな保留地を回るあいまに立ち寄った町ギャラップに近い、ニューメキシコ州のアコマ保留地を訪れた八月十五日の記述では、「きわめて美しく、奇妙な景色」と強調した上で、次のように書く。

熊と夜の鳥が内緒話に興じる岩の連なり。岩石のただなかに彫りこまれた、迷路状のすばらしい階段。⁽⁸⁾

いずれもいかにもメモ書き風の文章だが、ブルトンの想像力が刺激された様子が伺われる。また、カチナと風景の關係に注目した箇所も興味深い。住居のある場所によって、岩の台地のそれぞれの形状がカチナにほどこされた装飾の違いに反映されているというのだ。⁽⁹⁾

だが、この「手帳」の記述の白眉をなすのは、なんといっても、夏にインディアンたちが開く儀礼的な祭りでのダンスについての件りだ。ダンスにもいろいろな種類があり、歓迎のダンスや種植えの様子を模したスクワット・ダンスのほか、鹿のダンス、山羊のダンス、雌牛のダンスなどがあるが、とりわけブルトンの注意を引き付けたのは、羚羊のダンスと蛇のダンスだ。このダンスが始まると、たんなるメモ書きとは言いがたいほど、描写はおのずと克明になっていく。たとえば、八月二十一日に、ホテビラのあるサード・メサから東に移動したセカンド・メサにあるムスンヌビ（ミシヨннаビ）保留地で、羚羊一族を表わす一団が蛇一族を表わす一団を招くかたちでおこなわれたダンスの様子は次のように描かれる。

最初のグループのダンサーと二番目のグループのダンサーが向き合う。最初のグループのダンサーたちが〔手に持った〕ガラガラ蛇を振り始め、長い合唱と眩きが交互に続き（一種の祈りで、その間、ダンサーは前後にステップを踏む）、その最中に、ひとり若く、ひよりは年配の二人のダンサーが、若い方が口にくわえた玉蜀黍を年配の方が左手で支え、もう一方の手で若者の肩に手を添え、並んだ二つのグループのあいだを歌いながら進む。¹⁰

ブルトンが「とても荘厳で、重々しい」と形容し、「加入儀礼の雰囲気」があると説明するこのダンスはさらに続く。

最初に力強い行進があり、急いで四周（……）（彼らのあいだの間隔は不揃いで、各人が全体のことを気にかけず、自分のエネルギーのほどを見せつけていて、実に印象的だ）。隠されていた板の上でダンサーたちは足を踏み鳴らしているが、その板は、シ、パ、と呼ばれる、地下世界の入り口を表わす穴を覆っている。足での呼びかけは、巨大で羽のある水蛇の聖霊へのメッセージで、この水蛇はホビ族の神話の起源に位置づけられている。祭壇グレイトブルトン・ウオーター・サバット（小屋）の前を通るたびに、ダンサーたちは聖なる食糧をひとつまみ落としていく。¹¹

この日のダンスは羚羊のダンスという括りになり、翌二十二日が、「羚羊一族と蛇一族のキバ〔地下祈禱所〕での九日間の秘儀を締めくくる」蛇のダンスで、これは「雨乞い」のためのものとされるが、それは「蛇が雨の力の使者である」¹²からだ。この蛇のダンスについては、踊りだけでなく、歌について楽譜つきの説明も加えられて、羚羊のダンスの場合以上に詳細な記述がおこなわれる。まずは歌が三分ほど続き、それが突然止むと、選ばれた秘儀加入者が、

額だけ赤く、あとは黒く顔を塗った神官たちに蛇を渡し、神官は三人ずつ二つのグループを作り、一つのグループのなかでは二人が互いの首か腰を抱え、そのあとにもうひとりが続くというかたちになる。ブルトンは、この六人に一番から六番までの番号をふって、その動きなどを説明している。

彼らはもっと大きな声で別の歌を歌いはじめ、円を描き、つねに左足より右足を高く上げる。ときどき、二拍分、右足が空中に上げられたままになる。二周目で、また別の秘儀加入者が蛇を渡しはじめ、一番の神官が、差し出された蛇の頭のおよそ四インチのあたりを口にくわえ、蛇の尻尾のほうは左腕に巻く。

二番の神官は蛇の頭の前で羽根棒を振り回しつづける。四番と五番も同じ。

その間、三番と六番はそれぞれ二人組のうしろを歩いている。

こうしたことは、一番と四番が蛇を地面に投げ捨てるまで続く。すると三番と六番が蛇を操りはじめ、見物人から遠ざけたところに移動させて拾い上げる。次の一周でまた別の蛇がそれぞれのリーダーに渡され、同じことが繰り返されていく(いまではおよそ二十から二十五匹の蛇がいて、そのうちの四匹がガラガラ蛇で、穴居性蛇は何匹もいる)。ダンスの終わりに、三番と六番は両手いっぱい蛇を抱えている。ダンサーのひとりが噛まれたという印象を何度も抱いた。蛇の一匹が顔に巻きついて眼のあたりまで登ることもよくあった。⁽¹⁴⁾

この後、八月二十五日にブルトンたちは、ホテビラと同様にサード・メサにあり、北アメリカでも最も古くから人間が住んでいた場所とされるオリイビに戻って、雌牛のダンスに立ち会うのだが、このときもかなり詳しくその様子を手帳に記している。そして翌二十六日には東に移動して、アリゾナ州からニューメキシコ州に入り、一気にファー

スト・メサのワルピまで行き、この村の円形劇場でまた蛇の踊りを見る機会があった。ムスンヌビとの違いは、ダンサーたちが「白い羽根の束を頭のうしろに垂れさせ、白い模様と黒いジグザグの入った土色のスカートをはいている」⁽¹⁵⁾ほか、歌があまり美しくなく、声も小さかったことだが、ブルトンが一番驚いたのは、ダンサーの口元に蛇が見られなかった点だ。ところが、一周してきたダンサーは、「小さな蛇を文字通り口から吐き出す」⁽¹⁶⁾のである。一方、身体中に何十匹もの大きな蛇を巻きつけた別のダンサーは、「まぎれもなく恍惚とした表情」⁽¹⁷⁾を浮かべていた。

こうした記述のあと、ワルピで見たダンスはムスンヌビで見たダンスよりも野蠻だが、それほど荘厳な感じがなかったと感想めいた言葉が続く。この「手帳」全般は、客観的な記述がほとんどで、ブルトンの抱いた感慨などを推測させる箇所はほとんどないが、こうしたダンスをはじめ、インディアンの暮らしや風習、そして儀式をまぢかに見てブルトンが強い感銘を受けたことはまちがいないだろう。手帳に挟まれていた紙片には、書きかけの詩のような一節が記されていた。

とても悲しい大きな無垢が滑空し、急降下する

無垢な大きな悲しみ

いかにも超然として

ほとんど地上のものと思われぬ山、すでに天空に属し

宇宙へと憧れを膨らませる

大気の要素

それらは微笑みかけず、何事からも超然としている

インディアンはみずからの彼方を見つめる
星形の大地⁽¹⁸⁾

*

一九五二年に放送されることになるアンドレ・パリノーとのラジオ対談で、ブルトンはこの一九四五年夏の旅行を振り返り、次のように語っている。

……アメリカ西部に旅行して、ネヴァダ州、アリゾナ州、ニューメキシコ州に滞在することができました。そこでわたしは、「ゴールド・ラッシュ」時代の名残であるシルヴァー・シティやヴァージニア・シティといった光景を前にして、思わず足が止まったものでした。とりわけ、この旅行で、以前から強く抱いていた望みのひとつをかなえることができたのですが、それは、インディアン、なかでもその神話や芸術にわたしが特別の関心を抱いているプエブロ・インディアン（ホピ族とズニ族）のもとに行くという望みでした。彼らの村（ソンゴパビ、ワルピ、ズニ、アコマ）に入っていくと、自分たちが置かれた悲惨な状況とは根本から異なり、心を揺さぶるような対照をなす、変わることのない威厳と民族性を彼らが示すのを鮮烈に体験できたので、それを語りたいたいという考えを諦めてはいません。白人がときとして黒人や黄色人種に抱く公正さと償いの気持が高まってきている一方で、インディアンだけはますます置き去りにされてきているのは理解しがたいのですが、というのも、その創造力をいかに示してくれたインディアンこそが、ほかのどの民族にもまして搾取されているからです。⁽¹⁹⁾

興味深いのは、このブルトンの言葉は、どのような状況のなかで『シャルル・フリーエへのオード』が書かれたのかという質問に答えるなかで出てきたものだという点だ。実際ブルトンは、旅行中、とりわけその前半のレノ滞在中にこの長篇詩を執筆していた。だが、インディアン保留地を訪れるあいだも詩は書きつづけられていたと考えられる。詩の終盤には、リフレインのようにシャルル・フリーエへ挨拶を送る言葉が繰り返されるのだが、その各節が旅の過程を示してくれているからだ。「フリーエ わたしはあなたにコロラド州のグランド・キャニオンから挨拶を送る」⁽²⁰⁾「人間文化の化石の森からあなたに挨拶を送る」⁽²¹⁾「黄金探索者たちのいるネヴァダからあなたに挨拶を送る」⁽²²⁾「インディアンのダンスが終わったばかりのところでああなたに挨拶を送る」⁽²³⁾「今日一九四五年八月二十二日のムスヌビで蛇たちが最後にとぐろを巻いて人間の口との結合をなす用意があると示している瞬間に地下にある聖なる部屋にほかならないホピ族のキバに隠された大いなる神秘へと降りていく階段の下からあなたに挨拶を送る」⁽²⁴⁾。

むろん『シャルル・フリーエへのオード』はその題名が示すとおり、十八世紀後半のフランスに生まれた空想的社会主義者にブルトンが敬意を示した詩である。前年に書かれた『秘法十七』にもフリーエの名前は出てくるし、今回の旅行では、ニューヨークに住むようになってからようやく入手した一八四五年版のフリーエ全集を携え、それを毎日のように繙いてもいた。だがそのフリーエとインディアンがブルトンのなかでは分かちがたく絡み合っていたのである。一九五八年一月、のちに『シャルル・フリーエへのオード』の校訂本を上梓するジャン・ゴルミエ宛ての手紙でも、ブルトンは詩の執筆の背景をインディアン保留地への旅と関係づけて説明している。

詩のはじまりと終わりのあいだには、わたしがインディアン——とりわけエプロ民族——に対して抱いてい

た強い関心に導かれ、ネヴァダ州、アリゾナ州、ニューメキシコ州を横切ってニューヨークへと戻ってきた旅の時間が刻まれています。この民族が受けとめねばならなかった運命と彼らの感動的な威厳がわたしの夢想の背景となっていて、その上にシャルル・フリーエ——わたしが特別な愛情を寄せるフリーエ、『四運動』と神秘的な『類比』^{アラロイ}のフリーエ——という人格がくつきりと浮かび上がるように描かれることになったのです。⁽²⁶⁾

インタビュアーや書簡でのブルトンの言葉を追っていると、彼がインディアンに寄せる共感、搾取に遭いながらも威厳を失わないその姿勢によるところが大きいように取れるが、それもむろん大事な要素であるものの、すでに「ホピ・インディアン」の地への旅の手帳」で見えてきたように、儀式やダンスを丹念に追うそのまなざしは、ホピ族のうちに独特の創造性やそれを支える思考を見出していることがわかる。彼は、たとえば、「あたかもコマ落とし撮影を見ているかのよう」⁽²⁶⁾な気にさせ、そうした意味では自動筆記にもつながると言える砂^{サンド・ペインティング} 絵についても書きとめるのも忘れていないし、ホピ族が驚やその羽根に見出す意味にも注目する。

驚はホピ族にとって地上と天空を結ぶものとみなされている。だから驚の羽は重視されるのだ。
驚の羽は(ダンスの最中に持っているにせよ、いないにせよ)、祈りを天へと運ぶ手段だ。⁽²⁷⁾

こうしてインディアンの思考に寄り添えば、彼らのダンスもたんなるスペクタクルやパフォーマンスではなく、その世界観の表現であることが理解されてくる。ワルピで蛇のダンスを見たあとで、「手帳」の末尾近くに彼はこう記す。「この地においてすべてのものを補う大地とのこうした非常に深い対話の価値、その完璧で疑う余地のない真正

さを強調すること」⁽²⁸⁾。

インディアンの思考は、西洋人の発想からすれば明らかに無縁のものあいだに結びつきを見出す。そして最終的には、人間と自然、内的世界と外的世界のあいだにまで関係性を発見するだろう。ヴァンサン・ジルも指摘するところ、それは自然をひとつの「暗号」として読み解くことでもあり、さらに言えば、アナロジを打ち立てることである。⁽²⁹⁾ そう、シャルル・フリーエにとってきわめて重要であった思考法であり、シュルレアリスムの根幹を成す思考法につながるアナロジだ。「手帳」のなかで、『ギャラップ・インディペンデント』に載ったズニ族の哲学についての記事に触れたブルトンは、ホピ族と起源を同じくするこのインディアンたちが、「人間から遠ければ遠いだけ、動物や事物を尊敬する(犬、蛇)」とその内容を説明したあとで、「シュルレアリスムの考え方を参照せよ」⁽³⁰⁾と記すのである。これはまさに、ブルトンが『シュルレアリスム宣言』以来こだわりつづけてきたシュルレアリスムのイメージのあり方に重なってくるだろう。あるいはまた、『シャルル・フリーエへ捧げるオード』のなかで、ジュール・モヌロの『現代詩と聖なるもの』(邦訳題名『シュルレアリスムと聖なるもの』)の一節を引用しつつブルトンが綴った言葉を思ひ出さなければならぬ。

証拠の印を形づくる何本もの道と、わたしの足もとに落ちていたのをうやうやしく拾い上げたあの矢がつねに潜在的に描き続ける軌跡の交差路から、わたしはあなたに挨拶を送る。「超自然的なものと同然なもの(現実的なものと超現実的なもの)のあいだの分離、異質性など存在しない。いかなる断絶もない。それは「連続体」をなし、アンドレ・ブルトンの言葉に耳を傾けている気持になる。ソルトー・インディアンの名において語る民族誌学者だ」

なぜなら、ガラガラ蛇を嫌ってはいても、道徳的には最も恥すべき精神および感覚の錯乱と見なされるものも含めたさまざまな情熱が、人間に読解を要請する不可分の暗号を形成しているということをあなたは疑ったことなどないからだ

そしてまた、人間の魂と自然が同じ類型に応じるのは議論の余地がないとあなたは考え、

大急ぎで菜園に指標を探しに行ったからだ⁽³¹⁾

それこそ、インディアン思想とフリーエ思想が交差し共鳴し合う地点に、ブルトンはシュルレアリスムを位置づけようとしているのである。

*

一九四五年末、講演と文化交流のためにハイチを訪れたブルトンは、地元の若いシュレアリスト詩人ルネ・ペランスのインタヴューを受けた。差別の撤廃にシュルレアリスムは貢献するのか、帝国主義の犠牲になった有色民族はシュルレアリスムに参加することでどのような利益が得られるのか、と質問されたブルトンは、シュルレアリスムは、「程度の差はあれつねに専制的な自我」から「すべての人間に共通なエス」へと重点を移動させたのであり、その点で、差別の撤廃を「体系的に目指す唯一のもの」だと豪語したうえで、次のように続ける。

シュルレアリスムは有色民族と固く結ばれています、それはひとつには、帝国主義や白人による略奪行為の

あらゆる形態に反対し、有色民族の側に立ってきたからで、そのことは、モロッコ戦争や植民地博覧会などに反対してパリで発表したさまざまな宣言に見てとれるはずだ。またもうひとつには、いわゆる「未開の」思想とシュルレアリスムの思想のあいだには親近性が存在し、両者とも意識や日常の覇権を取り崩し、啓示的な情動を獲得しようとするからです。こうした親近性は、マルチニックの作家ジュール・モヌロが最近出した著作『現代詩と聖なるもの』で明確にされています。この本を読めば、この点に関して完璧に納得してもらえらると思いません。⁽³²⁾

翌一九四六年、フランスに帰国してジャン・デュシエのインタビューに応じたブルトンは、自宅のアトリエに置かれた仮面や人形などについて尋ねられた際、またしてもモヌロの著作を引き合いに出しつつ、インディアンの思考と積極的に評価することになる。まずブルトンは、エスキモーの仮面が白鯨と白鳥をかたどったものであること、そしてトウモロコシの女神を表したホピ族の人形の縁取りには山にかかる雲が、額の中央の市松模様には穂が、口のまわりには虹が、そして衣装の縦縞には谷に降る雨が見たとれると説明したうえで、「これこそ、わたしたちがそのようなものであってほしいと求めつづけている詩ではないでしょうか」と問いかけ、さらに言葉を連ねる。

二十世紀において、合理主義と功利主義のせいでひらめきの源泉が枯れてしまった事態をヨーロッパの芸術家が修復する可能性があるとするれば、それはいわゆる未開人のヴィジョン、感覚的知覚と精神的表象の総合を取り戻すことによってでしかないでしょう。黒人彫刻はすでにすばらしい貢献を成し遂げました。今日、知と関係性の新しい体系への接近を可能にしてくるのは、とりわけインディアンの造形作品なのです。だいいち、モヌロは

『現代詩と聖なるもの』で、シュルレアリスムの思考とインディアンの思考の親近性を明らかにしているわけですが、そのインディアンの思考が以前と変わらず生き生きとしていて創造性に充ちているのをわたしは確認することができました⁽³³⁾。

一方、シャルル・フリーエについてもジャン・ドゥシエによるインタヴューのなかでブルトンは言及している。

……得られるものが計りしれないほどあるのに、いまのところは十分に活用してはいない情念、引力の発見や、伝統的な認識および行動の仕方に対する絶対的懐疑という態度との関係で、フリーエにおいてこのうえなくわたしを魅了するのは、人間の情念と自然界の産物のあいだのアナロジーに基づき、世界の聖刻文字的解釈をもたらそうとするその構想なのです。フリーエはここで、十九世紀初めから詩や芸術を活気づけてきた関心事と、そうした関心事を考慮しようとしめない場合には未熟なままで終わってしまいかねない社会の再編成のあいだで、きわめて重要な連結をおこなっています⁽³⁴⁾。

フリーエ同様、インディアンも、アナロジを基盤として世界を「ヒエログリフ聖刻文字的」に解釈する可能性を模索していたのは、これまで見てきたことから明らかだろう。

ところで、こうしたアナロジは、すでに指摘したとおり、シュルレアリスムの初期からブルトンが重視していた「イメージ」の問題につながるはずである。『シュルレアリスム宣言』(一九二四)において、ブルトンはルヴェルディの言葉を手がかりに、「イメージ」について考えをめぐらせ、「二つの項のいわば自然の接近から、ある特殊な光、イ

メ、ジ、の光がほとぼしかった」としたうえで、さらに、「イメージの価値は、得られた閃光の美しさにかかっており、したがって、二つの伝導体間の電位差によって決まる」と述べていた。⁽³⁵⁾一方で狭義の文学や芸術、いわゆるアカデミックな文学や芸術を否定する彼は、それに対置すべきものとして「イメージ」を重視していたともいえる。詩人サン＝ポール・ルーについて一九二五年に書いた文章で、ブルトンは再度「イメージ」の問題を取り上げている。

何よりもこの世界を生成させる要素であり、旧来のものに代わって採用したいとわたしたちが考えているのは、詩人たちがイメージと呼ぶものである。さまざまな観念が空しいことは、たとえ手短にはあっても、吟味すれば如実となるだろう。厳選されてはいても、つねにある程度は慣習的なものになっている文学の表現方法は、精神に対して規律を課すが、それが精神にふさわしくないことをわたしは確信している。ただイメージだけが、予期しがたい突然のものをはらみ、解放の手だてをわたしにもたらしてくれるのだが、この解放はあまりにも完璧なもので、わたしは怖気づくほどだ。イメージの力によってこそ、時間を経てではあるが、真の革命が達成されうる。いくつかのイメージには、すでに地面の揺れの兆しがあるのだ。⁽³⁶⁾

その後、ブルトンは必ずしも「イメージ」という語をその著作で前面に出しつづけたわけではないが、「真の革命」を可能にする「イメージの力」はつねに彼の主要な関心事であったはずである。アメリカでの亡命生活を終えてフランスに帰国したのちの一九四八年、彼は新しいシュルレアリスムの機関誌『ネオン』を出す、その創刊号に発表した「上昇記号」という題の文章において、むしろアナロジーに力点を置きつつではあり、かなり神秘学への傾斜も示してはいるものの、例によってルヴェルディの言葉を引きつつ、やはり「イメージ」について語ることになる。そう

した一種の「イメージ」論のなかでブルトンは、「さまざまな始原的接触が断たれている」現状を嘆いたうえで、「この接触を、ただアナロジーという隠れた力だけが、束の間でも回復させてくれる」⁽³⁷⁾と述べるのだ。あるいは、詩的アナロジーと神秘的アナロジーは、「演繹の法則」を侵犯するという点で相通ずるとしながら、前者は、「不可視の宇宙」を前提としていない点で後者と異なり、むしろ「不在の」真の生を垣間見させ、浮き彫りにする⁽³⁸⁾と強調している。

「イメージ」、あるいはそれを成り立たせるモメントと言ってもいいアナロジーは、戦中から戦後にかけてもブルトンの思想の中核を占めていた。そしてそれは、アメリカ亡命中に雑誌『VVV』の創刊号に発表した「シュルレアリスム第三宣言、発表か否かのための序論」で言及される「新しい神話」に結びついていくのである。現に、ジャン・デュシエによるインタビューでシャルル・フリーエについて語ったブルトンは、質問に答えるかたちではあるが、それに続けて「新しい神話」に話題を移していく。

新しい神話の樹立の可能性を模索し、それに基づいて持続的な団結をめざす場合に、フリーエは、おおいに助力を仰ぐというわけではないにしても、まちがいはなくまず最初に問いかけるべき相手のひとりであることは、いくら強調してもしすぎることはないでしょう（わたしは、生成過程にあるそのすばらしい宇宙論、「超世界人」の住居である「芳しき殻」の概念のことなどを考えています。⁽³⁹⁾）

「シュルレアリスム第三宣言、発表か否かのための序文」でブルトンが、「透明な巨人」という「人間よりも上位」にいる存在を仮定しつつ、この「新しい神話」を論じたことはあらためて言うまでもない。この後、彼がしばしば言

及することになる「透明な巨人」とは、フリーエ的な宇宙論が可能になる視座であり、そこに位置するとき、人間中心的世界観は崩れ、狭く固定された視野のなかではとうてい想像しえぬさまざまなアナロジが可能となり、そのアナロジのダイナミズムのなかから「イメージ」が湧きおこってくるだろう。

アメリカ西部への旅を終えてニューヨークに戻ったブルトンは、一九四五年九月十五日、かつてパリで自分の本を出版してくれたレオン・ピエール・カンに手紙を書き、メキシコ、マルチニック、プエブロ・インディアンについての文章をまとめた「一種の旅行記」⁽⁴⁰⁾の原稿をそのうちに手渡すつもりだと明かす。翌年にサジテール社と出版契約まで結んだこの本が実際に刊行されることはなかった。しかし、たとえ正面からプエブロ・インディアンについて論じた文章が、例の「手帳」以外は残されていないにしても、こうした出版計画があったことから、ブルトンがいかにインディアンの思想に惹かれていたかは明らかだろう。だがそれは、ブルトンが自分とインディアンを同一視していたことを意味するわけではない。ジョゼ・ピエールのように、ホピ族の社会がフリーエの目指す「フアランスタール」⁽⁴¹⁾であり、「実現したユートピア」だと見なしたのであれば、ブルトンはアナロジの本質を見落としていたことになってしまう。アナロジは、同一化とは対極の運動性に貫かれており、隠喩などの場合とは異なり、なにか一項に最終的に収斂していく働きではない。それでは「イメージ」の閃光はきらめかないのだ。ブルトンにとっては、プエブロ・インディアンも、シャルル・フリーエも、自己との、あるいはシュルレアリスムとのアナロジを形成してくれる対象であった。そのようなアナロジの運動に巻き込まれてこそ、シュルレアリスムはその輝きを放ったのである。

(1) André Breton, *Entretiens 1913-1952*, in *Oeuvres complètes III*, Gallimard, 1999, p. 556. (アンドレ・ブルトン『ブルトン』、シ

- ユルレアリスムを語る』(福田三吉・佐山一訳)、思潮社、一九九四年、二二七頁)
- (2) André Breton, *Arcahe 17 enté d'AJours*, in *Œuvres complètes III*, op.cit., p. 80. (アンドレ・ブルトン『秘法十七』(入沢康夫訳)、人文書院、一九九三、一二五頁)
- (3) アメリカ連邦政府の公認するプエブロ・インディアンにホビ族やズニ族は含まれていないが、一般にこの呼称は、メキシコ北部と合衆国西部のニューメキシコ州やアリゾナ州に残る伝統的な先住民の共同体を指す。
- (4) André Breton, *Le Surrealisme et la peinture*, Gallimard, 1965, p. 27. (アンドレ・ブルトン『シュルレアリスムと絵画』(瀧口修造・巖谷國士監訳)、人文書院、一九九七年、二七頁)
- (5) ただし、このときのカチナは、主にマルセル・デュシャンとアンリ＝ピエール・ロシェのコレクションから出品されたものだとされる。
- (6) André Breton, «Carnet de voyage chez les Indiens Hopi», *Œuvres complètes III*, op.cit., p. 185.
- (7) *Ibid.*, p. 191.
- (8) *Ibid.*, p. 192.
- (9) *Ibid.*, p. 187.
- (10) *Ibid.*, p. 196.
- (11) *Ibid.*
- (12) *Ibid.*, p. 197.
- (13) *Ibid.*, p. 198.
- (14) *Ibid.*, p. 199 - 200.
- (15) *Ibid.*, p. 207.
- (16) *Ibid.*, p. 208.
- (17) *Ibid.*
- (18) *Ibid.*, p. 209.
- (19) André Breton, «Entretiens 1913 - 1952», *Œuvres complètes III*, op.cit., p. 561. (『ブルトン、シュルレアリスムを語る』、二二一

六頁)

- (20) André Breton, 《Ode à Charles Fourier》, *ibid.*, p. 360. (「アンドレ・ブルトン」シャルル・フーリエへのオード」(菅野昭正訳)、『アンヰレ・ブルトン集成4』、人文書院、一九七〇年、二五六頁)
- (21) *Ibid.* (同書、二五六頁)。ちなみに、「化石の森」とは、アリゾナ州北東部に実在する国立公園の名前である。
- (22) *Ibid.*, p. 361. (同書、二五七頁)
- (23) *Ibid.* (同書、二五八頁)
- (24) *Ibid.*, p. 362. (同書、二五九—二六〇頁)
- (25) Lettre citée dans «Introduction par Jean Baumier》pour *Ode à Charles Fourier* d'André Breton (Fata Morgana, 1994), p. 18
- (26) André Breton, 《Carnet de voyage chez les Indiens Hopi》, op.cit., p. 192.
- (27) *Ibid.*, p. 190.
- (28) *Ibid.*, p. 209.
- (29) Vincent Gille, 《Partie liée : le surréalisme et les Hopi》, in *La Danse des Kachina : poupées Hopi et Zuni dans les collections surréaliste et alentour*, Paris-Musée, 1998, p. 20 sq.
- (30) André Breton, 《Carnet de voyage chez les Indiens Hopi》, op.cit., p. 192.
- (31) André Breton, 《Ode à Charles Fourier》, op.cit., p. 361 - 362. (「アンドレ・ブルトン」シャルル・フーリエへのオード」前掲書、二五九頁)
- (32) André Breton, 《Entretiens 1913 - 1952》, op.cit., p. 586. (『ブルトン』シュルレアリスムを語る』、二二六頁)
- (33) *Ibid.*, p. 593 - 594. (同書、二七五—二七六頁)
- (34) *Ibid.*, p. 598. (同書、二八二頁)
- (35) André Breton, 《Manifeste du surréalisme》, *Œuvres complètes I*, Gallimard, 1988, p. 337 - 338. (「アンヰレ・ブルトン」『シュルレアリスム宣言・溶ける魚』(巖谷國士訳)、『岩波文庫』、六六頁)
- (36) André Breton, 《Le Maire de l'image》, *ibid.*, p. 901.

- (37) André Breton, «Signe ascendant», *La Clé des champs*, in *Œuvres complètes III*, op.cit., p. 767. (アンドレ・ブルトン「上昇記号」、『野をひらく鍵』（粟津則雄訳）、『アンドレ・ブルトン集成7』、人文書院、一九七二年、一七二頁）
- (38) *Ibid.* (同書、一七二頁)
- (39) André Breton, «Entretiens 1913 – 1952», op.cit., p. 598 – 599. (『ブルトン、シユルレアリスムを語る』、二八二―二八三頁)
- (40) Note au «Carnet de voyage chez les Indiens Hopi», *Œuvres complètes III*, op. cit., p. 1224.
- (41) José Pierre, «Le Hopi, la poupée et le poète», in: *Kachina des Indiens Hopi*, Saint-Vit, Editions Amiez, 1992, p. 115. なお、ジョゼ・ピエールの見解にやはり批判的な視点からこの問題を扱った論文に以下のものがある。鈴木雅雄「ギブ・ミー・ユア・ブック」——ブルトンとホピ・インディアンの出会いに関する覚書、『文化解体の想像力』、人文書院、二〇〇〇年。